

ODIPv3.3 修正パッチ (P1030300003572) リリースノート

2018/08/29

(株) インテリジェント・モデル

この文書は、ODIP™ Enterprise Solution v3.3 に対する修正パッチ (Build-id: 1030300003572) に関する修正を記述したものです。

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

A. 変更内容.....	4
1. コンポーネント名の既定値の設定機能追加.....	4
2. 処理実行中のトランスフォーマ・リポジトリのリリースに対応.....	5
3. プロセス番号の廃止.....	7
4. 画面表示の改善.....	9
5. ODIP トランスフォーマの変更.....	11
6. 不具合の修正.....	11
B. 適用方法.....	14
1. パッチファイルの内容.....	14
2. ODIP アドミニストレータへのパッチの適用.....	14
3. ODIP オペレーションマネージャへのパッチの適用.....	15
4. ODIP リポジトリマネージャ/プロセスマネージャへのパッチの適用.....	15
5. ODIP リポジトリサーバへのパッチの適用.....	16
6. ODIP トランスフォーマへのパッチの適用.....	17
7. トランスフォーマ・リポジトリの更新.....	17

A. 変更内容

1. コンポーネント名の既定値の設定機能追加

ODIP アドミニストレータの [ツールメニュー > プリファレンス] の [初期名称 > コンポーネント名] に、コンポーネント名の既定値の設定画面が追加されました。(図 1)

管理単位を除くコンポーネントの種類ごとに、指定した名称が新規コンポーネントの名前入力ダイアログに自動的に設定されます。また、名称には%k (管理単位名)、%p (上位コンポーネント名)、%t (コンポーネントの種類) の各変数を使用できます。すべてのコンポーネント名の既定値を変更するには、「一括指定」ボタンで表示されるダイアログで設定してください。

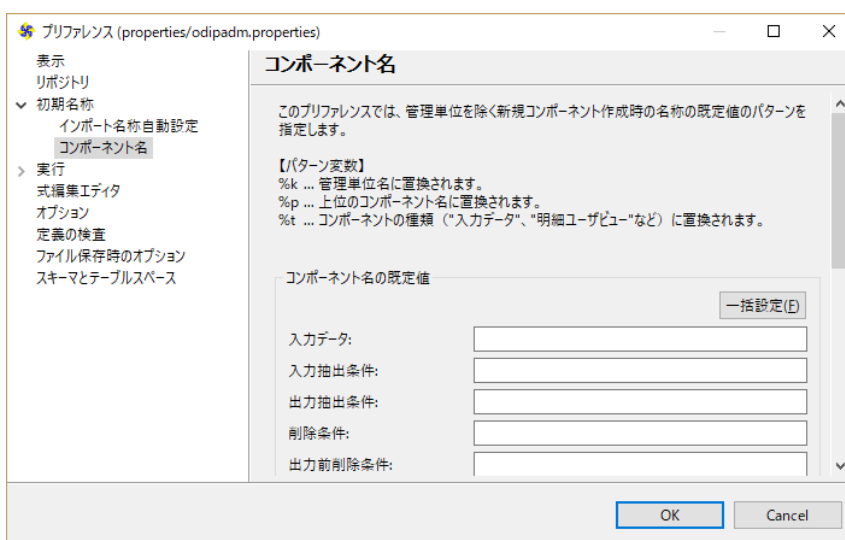
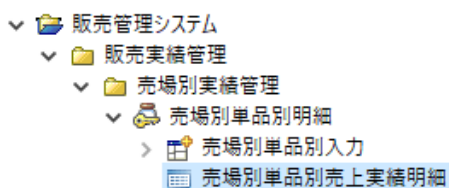


図 1 コンポーネント名の既定値の設定画面



例えば、出力抽出条件のコンポーネント名の既定値に「%p - %t (%k)」が指定されているとき、左図のユーザビュー「売場別単品別売上実績明細」に出力抽出条件を追加すると、「売場別単品別売上実績明細 - 出力抽出条件 (売場別単品別明細)」が既定の名前となります。(図 2)

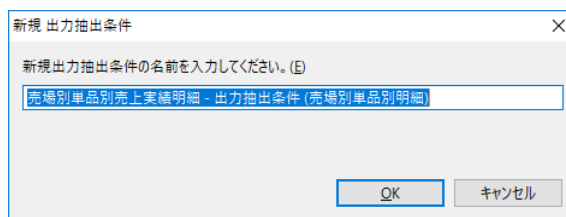


図 2 新規コンポーネント名の入力ダイアログ

既に存在しているコンポーネントの名称にも既定値のパターンを適用するには、フォルダ・タブでフォルダまたはコンポーネントを選択し、「コンポーネント名の更新...」(図 3) を実行してください。選択した定義より下の階層のコンポーネント名が一括で既定値に変更されます。

同じ種類のコンポーネントが既に存在し、名前が重複する場合は、2 目以降のコンポーネント名に自動的に_1、_2 のように番号が付与されます。中間入力データ (<Interim>定義) の名称はこの機能で更新されません。

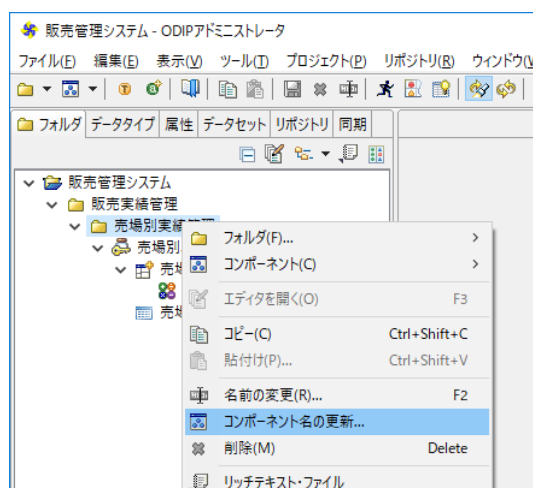


図 3 フォルダ・タブのコンテキストメニュー

2. 処理実行中のトランスフォーマ・リポジトリのリリースに対応

(1) 概要

処理実行中のトランスフォーマ・リポジトリのリリースに対応しました。

この機能を有効にすることにより、以下のオペレーションで発生するトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスが排他的に行われます。ただし、ODIIP アドミニストレータからトランスフォーマ・リポジトリを作成した場合は従来どおり、実行中の処理がエラーになる可能性があります。

- ・ startjob コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによる処理の実行
- ・ repimp コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによるトランスフォーマ・リポジトリのインポート
- ・ repedit コマンドまたは ODIP オペレーションマネージャによるデータソース情報編集
- ・ ODIP プロセスマネージャからのトランスフォーマ・リポジトリの作成／更新

本機能では batchMain.conf に下表のパラメータが追加されました。

パラメータ	説明
repository_exclusive_control=[y または n]	ジョブの実行中にトランスフォーマ・リポジトリの更新をエラーなく行えるようにするかどうかを指定します。y にするとトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスが排他的になり、ジョブ実行中であっても、repimp コマンド (またはオペレーションマネージャによるインポート)、repedit (またはオペレーションマネージャによるデータソース情報の編集) を正常に行うことができます。 何も指定がない場合の既定値は n です。
repository_exclusive_lock_waittime=[秒数]	repository_exclusive_control=y のとき、repimp コマンド (またはオペレーションマネージャによるインポート)、repedit コマンド (またはオペレーションマネージャによるデータソース情報の編集) がトランスフォーマ・リポジトリのロックを獲得するまでの待機秒数を指定します。 指定秒数を経過してもロックが獲得できない場合、repimp 等のオペレーションはエラーで失敗します。 何も指定がない場合の既定値は 600 (秒) です。

(2) 設定の変更

この機能を有効にするには、ODIP トランスフォーマの設定ファイル batchMain.conf に以下のパラメータを設定してください。(秒数の指定は任意。指定しない場合は 600 秒。)

```
repository_exclusive_control=y
repository_exclusive_lock_waittime=秒数
```

また、プロセスマネージャからのトランスフォーマ・リポジトリの作成も repimp コマンドと同様に排他制御を行うには、プロセスマネージャのインストールフォルダにある prcmng.vmoptions (64bit 版の場合は prcmng_x64.vmoptions) に以下の行を追加してください。(秒数の指定は任意。指定しない場合は 600 秒)

```
repository.exclusive.control=true
repository.exclusive.lock.waittime=秒数
```

(3) 留意点

① LOCKMNGTBL の追加について

新たにトランスフォーマ・リポジトリのテーブルとして LOCKMNGTBL が追加されました。LOCKMNGTBL はトランスフォーマ・リポジトリのエクスポート/インポートの対象外です。そのため、エクスポートしても、tsv ファイルは作成されません。

② ロックが残る可能性について

本機能はトランスフォーマ・リポジトリへのアクセスが安全に行われるように LOCKMNGTBL の表ロック、行ロックを利用します。そのため、ロック取得中のプロセスが SIGKILL によって強制終了された場合やクラッシュした場合、データベースによってはロックが残り、解放されるまで他のオペレーションが実行できない可能性があります。

対策として例えば Oracle では、非アクティブなセッションの検知とロックの解放を早めるために、\$ORACLE_HOME/network/admin/sqlnet.ora のパラメータ SQLNET.EXPIRE_TIME に比較的短い時間を設定することを検討してください。緊急の場合は、LOCKMNGTBL へのロックを長時間取得しているセッションの強制終了をデータベース管理者に依頼してください。

3. プロセス番号の廃止

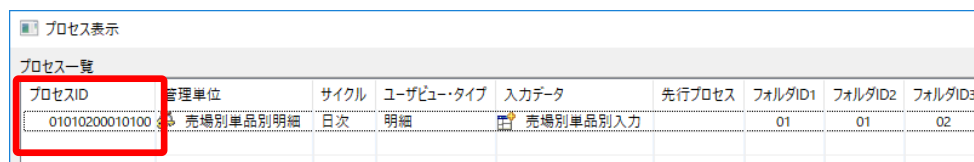
トランスフォーマ・リポジトリを作成するごとに自動で採番される 6 桁のプロセス番号が廃止され、各プロセスを特定する ID が 14 桁のプロセス ID に統一されました。また、ジョブ番号も従来の 10 桁から 18 桁に拡張されました。

プロセス ID は従来どおり変更はありませんので、startjob コマンドのオプション -pi でプロセス ID を指定して起動しているジョブネット側のジョブも変更の必要はありません。

各製品の主な変更箇所は次(1)～(4)のとおりです。

(1) アドミニストレータ

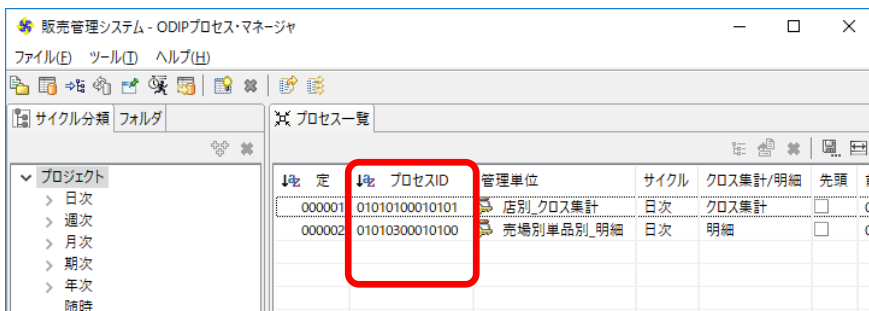
[実行]ダイアログの「プロセス表示」ボタンで開くプロセス表示ダイアログのプロセス番号がプロセス ID に変更されました。



プロセスID	管理単位	サイクル	ユーザビュータイプ	入力データ	先行プロセス	フォルダID1	フォルダID2	フォルダID3
01010200010100	売場別単品別明細	日次	明細	売場別単品別入力		01	01	02

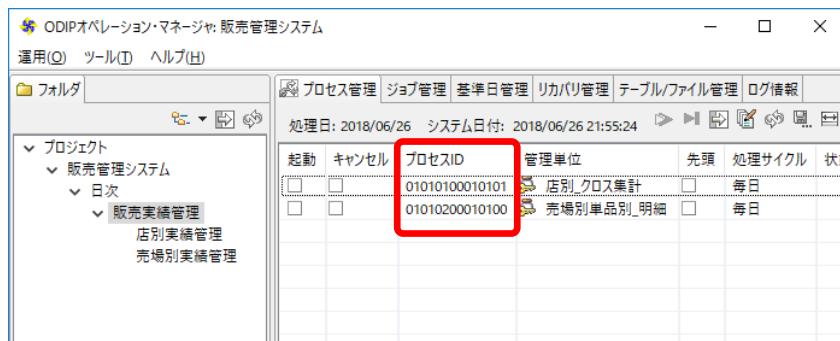
(2) プロセスマネージャ

プロセス番号とプロセス ID の両方が表示されているビューから、プロセス番号が削除されました。プロセス番号だけが表示されているビューでは、プロセス番号に代えてプロセス ID が表示されるようになりました。



(3) オペレーションマネージャ

プロセス番号とプロセス ID の両方が表示されているビューから、プロセス番号が削除されました。プロセス番号だけが表示されているビューでは、プロセス番号に代えてプロセス ID が表示されるようになりました。



(4) トランスフォーマ

odipjob.log の 3 項目にプロセス番号が出力されていましたが、値が出力されなくなり、5 項目目のジョブ番号は 10 桁から 18 桁に変更されました。

odipjob.log の出力例)

• 変更前

2017/06/21 13:47:00, user01, **000001**, 01000000010100, **0000010001**, I, ジョブ 開始, 運用管理サーバ, ジョブ管理, 20180621155908973

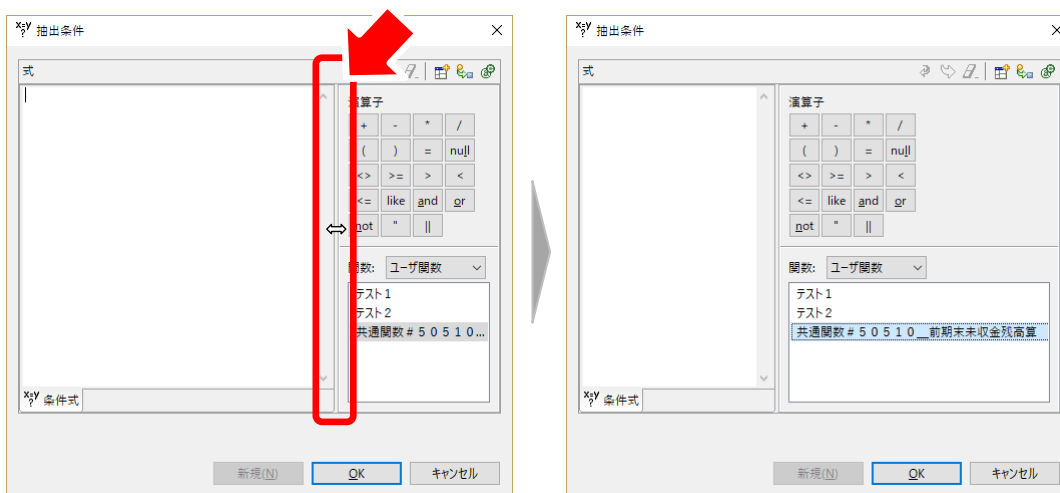
・変更後

2017/06/21 13:47:00, user01, , 01000000010100, **010000000101000001**, I, ジョブ 開始, 運用管理サーバ, ジョブ管理, 20180621155908973

4. 画面表示の改善

(1) ODIP アドミニストレータ

- ① 導出演算、抽出条件、ユーザ関数の式編集ダイアログでは、演算子及び関数一覧表示部のサイズが変更できるようになりました。下図の境界部をドラッグし、左方に移動することで、サイズを変更することができます。



- ② ファイルメニューの「データ名称インポート」において、インポートデータの確認画面の表示に次の変更が行われました。

- ・ 次のエラーまたは警告を検索する「Next error/warning」アイコンが削除されました。その代わりに、[Ctrl]+[e]キーによって次のエラーを検索、[Ctrl]+[w]キーによって次のワーニングを検索できるようになりました。
- ・ ビューアに、標準のソート及びフィルタオプションが追加されました。ヘッダ部をクリックすると、オプションが表示されます。
- ・ エラー/警告の表示列が追加されました。エラー、警告、削除の区分が、アイコンと共に表示されます。

- ③ 「参照」タブでは、複数行を選択してクリップボードへのコピーを行うことができるようになりました。

- ④ 「問題点」タブの「全消去」アイコンをクリックすると、メッセージの消去と同時に、フォルダツリーのエラー/ワーニングアイコンも消去されるようになりました。
 - ⑤ 「変更点」タブでは、「詳細」ウィンドウを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
 - ⑥ ツールメニューの「リスト表示」、「全参照」のダイアログのように、表形式の表示画面において、ヘッダをドラッグ&ドロップすることで列の順番を変更し、行をクリップボードにコピー&ペーストした場合に、列値がデフォルトの列順でペーストされていましたが、変更後の列順に値がペーストされるように修正されました。
 - ⑦ プロジェクトメニューの「データソース情報」ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
 - ⑧ ヘルプメニューの「ヘルプコンテンツ」ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
 - ⑨ 「情報」タブに、「リポジトリ最終更新日」、「リポジトリ最終更新ユーザ」、「バージョン」の表示欄が追加されました。ORMS からチェックアウトした時点のリポジトリ情報が表示されます。チェックアウト後にリリースして ORMS と連携していない場合、この情報は表示されなくなります。
 - ⑩ 「ツール」メニューの「リスト表示」のコンポーネント（データセット、管理単位など）一覧表示画面に、「リポジトリ最終更新日」、「リポジトリ最終更新ユーザ」、「バージョン」が追加されました。ORMS からチェックアウトした時点のリポジトリ情報が表示されます。チェックアウト後にリリースして ORMS と連携していない場合、この情報は表示されなくなります。
- (2) ODIP プロセスマネージャ
- ① ツールメニューの「データセット情報」ダイアログに、次の変更が行われました。
 - ・最大化/最小化のオプションが追加されました。
 - ・前回のウィンドウ位置及びサイズを再現して開くようになりました。
 - ・ダイアログを開いたときに、入出力データセット情報の列幅が自動的に調整されて表示されるようになりました。
 - ② ツールメニューの「データソース情報」ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
 - ③ ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

(3) ODIP リポジトリマネージャ

- ① ファイルメニューの「インポート」ダイアログ下部の「問題点」の表示に次の変更が行われました。
 - ・複数行を選択してクリップボードへのコピーを行うことができるようになりました。
 - ・エラー/警告の表示列に、アイコンに加えて「エラー」、「警告」の文字列が表示されるようになりました。
 - ・項目の反映によって問題点の表示が更新されるときに、列幅が自動調整されるようになりました。
 - ・フォルダツリー表示と問題点との境界に枠線が表示されました。枠線をドラッグして移動することでサイズの変更ができます。
- ② ファイルメニューの「他のリポジトリからインポート」において、「プロジェクト、バージョン選択」オプションダイアログの「参照」ボタンを押して表示されるバージョン選択ダイアログは、ファイルメニューの「エクスポート」で表示される「履歴」ダイアログと同じ画面が表示されるようになりました。
- ③ 「変更内容」の「相違点」表示画面では、「詳細」ウィンドウを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。
- ④ ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

(4) ODIP オペレーションマネージャ

- ① ヘルプメニューのヘルプコンテンツ・ウィンドウは、オプションを複数回選択しても、一つのウィンドウだけが表示されるように変更されました。

5. ODIP トランスフォーマーの変更

ODIP トランスフォーマーの処理において、異なるデータベース上のテーブル同士の結合は、エラーとなり、異常終了するように改定されました。ODIP トランスフォーマーは、独自の方式によって、異なるデータベース上のテーブルを結合する機能がありますが、同じデータベース上のテーブルを SQL によって結合する場合と、ODIP 独自の方式によって結合する場合とで、処理結果が異なることがありました。

6. 不具合の修正

(1) ODIP アドミニストレータの修正

- ① 導出演算の初期値に設定された選択属性が削除されると、定義の検査・トランスフォーマ・リポジトリの作成で NULL 例外が発生する可能性がある問題が修正されました。
 - ② 時系列演算を含む管理単位をコピー&ペーストすると、NULL 例外が発生する可能性がある問題が修正されました。
 - ③ 明細ユーザビューにおいて、出力属性を、同じデフォルトカラム名をもつ他の属性に変更すると、「ユーザビューにあわせてデータセットを更新」したときに、出力データセットのカラム名に、属性のデフォルトカラム名ではなく、“FLD001”のように自動生成されたカラム名が設定される問題が修正されました。
 - ④ 管理単位実行時のパラメータ設定ダイアログで「パラメータファイル・パス」で指定したパラメータファイルの「KEY = VALUE」の設定において、VALUE にスペースで始まる文字列（例えば、「 ABC」）を指定することができませんでした。パラメータ設定ダイアログで「パラメータ」では、文字列をダブルクォテーションで囲う（例えば、「" ABC"」）とスペースで始まる文字列を渡すことができますが、パラメータファイルでは、VALUE のダブルクォテーションは一つの文字と解釈され、ダブルクォテーションを含む文字列が返されました。本パッチでは、パラメータファイルとパラメータ文字列とで VALUE の指定方法が同じになるように修正されました。パラメータファイル内においても、例えば、KEY = “ ABC” のように、値をダブルクォテーションで囲むことで、スペースで始まる文字列を渡すことができます。
 - ⑤ Windows 10 version 1803 への更新後に ODIP アドミニストレータを実行すると、データソース編集ダイアログの OK ボタンを押下した直後に Java VM がクラッシュする問題が修正されました。
- (2) ODIP プロセスマネージャの修正
- Windows 10 version 1803 への更新後に ODIP プロセスマネージャを実行すると、データソース編集ダイアログの OK ボタンを押下した直後に Java VM がクラッシュする問題が修正されました。
- (3) ODIP オペレーションマネージャの修正
- ① ファイルメニューの「データソース情報」において、データソース情報の編集ダイアログで「テスト」ボタンを押したときに、“インタラクティブモード”で接続の試行が行われていましたが、“トランスフォーマサーバモード”で接続の試行を行うように修正されました。
 - ② Windows 10 version 1803 への更新後に ODIP オペレーションマネージャを実行すると、データソース編集ダイアログの OK ボタンを押下した直後に Java VM がクラッシュする

問題が修正されました。

(4) ODIP トランスフォーマの修正

- ① 導出演算の初期化処理で定義された#COUNT、#MAX、#MIN、#AVG の関数実行時に、startjob コマンドの“-inp” オプションによるテーブル/ファイル名の変更が反映されず、定義上のテーブル/ファイル名を用いて件数の集約が行われていました。変更後のテーブル/ファイル名を用いるように修正されました。
- ② 導出演算の初期化処理で定義された#COUNT 関数の実行時に、データソースが固定長ファイルでかつ対象となるファイルが存在しない場合には、処理が異常終了するように変更されました。
- ③ startjob コマンドの-paramfile (-pf) オプションのパラメタファイルの「KEY = VALUE」の設定において、VALUE にスペースで始まる文字列（例えば、「 ABC」）を指定することができませんでした。-param (-pa) オプションのパラメタ文字列では、文字列をダブルクォテーションで囲う（例えば、「" ABC"」）とスペースで始まる文字列を渡すことができますが、パラメタファイルでは、ダブルクォテーションは一つの文字と解釈され、ダブルクォテーションを含む文字列が返されました。本パッチでは、パラメタファイルとパラメタ文字列とで VALUE の指定方法が同じになるように修正されました。パラメタファイル内においても、例えば、KEY = “ ABC”のように、値をダブルクォテーションで囲むことで、スペースで始まる文字列を渡すことができます。
- ④ 導出演算の集約計算による導出項目が終了処理の条件式または計算式で参照され、その計算式から求まる導出項目を通常計算の条件式または計算式で参照している場合、通常計算は、集約計算後通常計算とみなされ、他の通常計算と異なるタイミングで計算が実行される問題が修正されました。
- ⑤ 入力データにコード変換（連結、分離、レンジ変換、カテゴリ変換）定義がある場合に、導出演算（終了）で定義された導出演算が実行されない問題が修正されました。

B. 適用方法

本パッチは、次の ODIP 製品に適用してください。

- ODIP アドミニストレータ v3.3
- ODIP オペレーションマネージャ v3.3
- ODIP リポジトリマネージャ v3.3/ODIP プロセスマネージャ v3.3
- ODIP リポジトリサーバ v3.3
- ODIP トランスフォーマ v3.3

1. パッチファイルの内容

本パッチには、次のフォルダとファイルが含まれています。

フォルダ		ファイル名	
ODIP33_P003572	lib	ADM	odpa.jar、odpac.jar、odpar.jar、odpat.jar、odpc.jar、odpcdb.jar、odpcm.jar、odpcui.jar、odpext.jar、odpdm.jar、odprc.jar、odptc.jar、odpten.jar、odptre.jar
		OPE	odpc.jar、odpcdb.jar、odpcm.jar、odpcui.jar、odpom.jar、odptc.jar、odptre.jar
		RPM	odpc.jar、odpcdb.jar、odpcm.jar、odpcui.jar、odpdm.jar、odppm.jar、odprc.jar、odpprm.jar、odptc.jar、odptre.jar
		RPS	odpc.jar、odpcdb.jar、odpcm.jar、odpcui.jar、odpdm.jar、odprc.jar、odiprs.jar
		TFM	odpc.jar、odpcdb.jar、odpcm.jar、odptc.jar、odptcl.jar、odpten.jar、odptre.jar、odptsv.jar

2. ODIP アドミニストレータへのパッチの適用

- (1) ODIP アドミニストレータを実行中の場合は終了してください。
- (2) フォルダ lib/ADM 内の全ファイルを、ODIP アドミニストレータのインストールディレクトリ（デフォルトでは、“C:\Program Files\ODIP\Administrator” になります）直下にある “lib” フォルダに上書きコピーしてください。
- (3) ODIP アドミニストレータを起動し、ヘルプメニューの “ODIP について” を選択し、次のビルド ID が表示されることをご確認ください。

名称	ビルド ID
Administrator	1030300003564
Component editor	1030300003564
Repository client access	1030300003564
Transformer client access	1030300003564
Common	1030300003564
Common user interface	1030300003564
Common database	1030300003564
Common model	1030300003572
Repository interface	1030300003564
Transformer engine	1030300003572
Transformer common	1030300003564
Transformer repository	1030300003564
Deprecated models	1030300003564

3. ODIP オペレーションマネージャへのパッチの適用

- (1) ODIP オペレーションマネージャを実行中の場合は終了してください。
- (2) フォルダ lib/OPE 内の全ファイルを、ODIP オペレーションマネージャのインストールディレクトリ（デフォルトでは、“C:\Program Files\ODIP\Operation Manager” になります）直下にある “lib” フォルダに上書きコピーしてください。
- (3) ODIP オペレーションマネージャを起動し、ヘルプメニューの “ODIP について” を選択してください。次のビルド ID が表示されることをご確認ください。

名称	ビルド ID
Operation manager	1030300003564
Common	1030300003564
Common user interface	1030300003564
Common model	1030300003572
Common database	1030300003564
Transformer common	1030300003564
Transformer repository	1030300003564

4. ODIP リポジトリマネージャ/プロセスマネージャへのパッチの適用

- (1) ODIP リポジトリマネージャ、ODIP プロセスマネージャを実行中の場合は終了してください。
- (2) フォルダ lib/RPM 内の全ファイルを、ODIP リポジトリマネージャ/プロセスマネージャのインストールディレクトリ（デフォルトでは、“C:\Program Files\ODIP\Repository Manager” になります）直下にある “lib” フォルダに上書きコピーしてください。
- (3) ODIP リポジトリマネージャと ODIP プロセスマネージャを起動し、ヘルプメニューの

“ODIP について” を選択してください。次のビルド ID が表示されることをご確認ください。

(ODIP リポジトリマネージャ)

名称	ビルド ID
Repository manager	1030300003564
Common	1030300003564
Common model	1030300003572
Common user interface	1030300003564
Repository interface	1030300003564
Deprecated models	1030300003564

(ODIP プロセスマネージャ)

名称	ビルド ID
Process manager	1030300003564
Common	1030300003564
Common model	1030300003572
Common user interface	1030300003564
Common database	1030300003564
Repository interface	1030300003564
Transformer common	1030300003564
Transformer repository	1030300003564
Deprecated models	1030300003564

5. ODIP リポジトリサーバへのパッチの適用

- (1) ODIP リポジトリサーバを実行中の場合は終了してください。
- (2) フォルダ lib/RPS 内の全ファイルを、ODIP リポジトリサーバのインストールディレクトリ（デフォルトでは、“C:\Program Files\ODIP\Repository Server” になります）直下にある “lib” フォルダに上書きコピーしてください。
- (3) ODIP リポジトリサーバを起動してください。
- (4) ODIP リポジトリマネージャを起動し、ツールメニューの “ORMS サーバ情報” を選択してください。次のビルド ID が表示されることをご確認ください。

名称	ビルド ID
Repository server	1030300003564
Common	1030300003564
Common model	1030300003572
Common user interface	1030300003564
Repository interface	1030300003564
Deprecated models	1030300003564

6. ODIP トランスフォーマーへのパッチの適用

- (1) ODIP トランスフォーマー・サーバを実行中の場合は、“stopserver”コマンドを実行して、トランスフォーマー・サーバを停止してください。
- (2) フォルダ lib/TFM 内の全ファイルを、ODIP トランスフォーマーのインストールディレクトリ直下にある “lib” フォルダに上書きコピーしてください。
- (3) ODIP トランスフォーマー・サーバを起動してください。“showserver -i v” コマンドを実行して、下表のビルド ID が表示されることをご確認ください。これ以外のライブラリについては、従来のビルド ID が表示されます。

名称	ビルド ID
Common	1030300003564
Common model	1030300003572
Common database	1030300003564
Transformer common	1030300003564
Transformer repository	1030300003564
Transformer server	1030300003564
Transformer engine	1030300003572
Transformer Client Commands	1030300003564

7. トランスフォーマー・リポジトリの更新

本パッチでは、トランスフォーマー・リポジトリのテーブル定義が変更されています。そのため、既に存在しているトランスフォーマー・リポジトリに対しては、バージョンアップ後に次の(1)、(2)のいずれかの方法でトランスフォーマー・リポジトリを更新してください。

(1)はオペレーションマネージャで何かしらの設定を行っており、その設定を残したい場合、(2)はオペレーションマネージャから設定を行っていない、もしくは残す必要がない場合の手順になります。どちらか判断がつかない場合は(1)の手順を実行してください。

(1) repconv コマンドによる変換

ODIP オペレーションマネージャを利用して以下のような設定を行っている場合は、repconv コマンドを実行して、旧バージョンで作成されたトランスフォーマー・リポジトリを新バージョンのレイアウトに変換してください。

- ・ 前後スクリプト
- ・ パラメタファイル・パス
- ・ サイクル基準日

- ・ リカバリ条件
- ・ DDL テンプレート

実行例)

```
$ repconv.sh -rn <リポジトリ名>
```

repconv コマンド実行後、通常どおりプロセスマネージャ等からトランスフォーマ・リポジトリを作成してください。

(2) 「再作成」オプション付きで更新

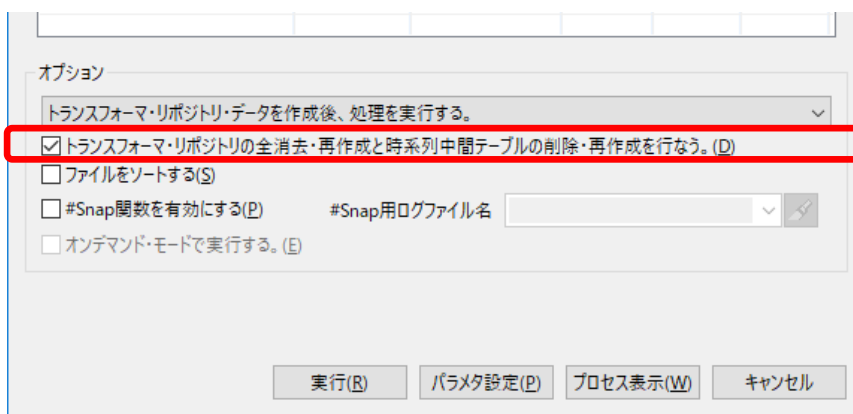
ODIP オペレーションマネージャから特に設定を行っていない場合は、初回に一度、次の①～③のいずれかの方法でトランスフォーマ・リポジトリの再作成を行ってください。

① ODIP プロセスマネージャから

トランスフォーマ・リポジトリ生成のダイアログで「トランスフォーマ・リポジトリを初期化する」にチェックを付けて実行してください。

② ODIP アドミニストレータから

実行ダイアログで「トランスフォーマ・リポジトリの全消去・再作成と時系列中間テーブルの削除・再作成を行う。」にチェックを付けて実行してください。



③ ODIP トランスフォーマの repimp コマンドで

repimp コマンドでインポートする際に、-ra オプションを付けて実行してください。

```
$ repimp.sh -rn <リポジトリ名> -dir <ディレクトリ名> -ra
```

以 上